

# ひらほく新聞



「ひらほく新聞」で検索！  
 ★ホームページ・ひらほくランド★  
<http://www.hirahoku.com/>  
 ☆バックナンバー含む「ひらほく新聞」を  
 閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

# 自反尽己

有難く愛読させていただいている「人間学を学ぶ月刊誌・致知」の2017年10月号の特集『自反尽己』とは、自らに返り己を尽くすということ。平たくいえば、自反とは指を相手に向けるのではなく自分に向け、すべてを自分の責任と捉え、自分の全力を尽くすことであるという。二話を抜萃、ご紹介します。

飛騨高山の地に行列と弟子入り希望が絶えないパン屋「トラン・ブルー」がある。オーナーシェフの成瀬正氏は、いかにして腕を磨き、繁盛店へと育て上げたのか。決して妥協を許さない求道の歩みは、自反尽己の精神の化身に他ならない。

～インタビューより～  
 私はパン職人になって三十年経つんですけど、いまだに自分が理想とするパンに仕上がったことは一度もありません。どの世界でもそうだと思いますんですけど、満足してしまつたらそこから進歩がない。どうしたら100%のものがつくれるんだらうと常に考えながら日々闘っています。

スタッフに日頃よく伝えていくことの1つは「パンが輝くかどうかはつくる人の人間性」ということです。面倒くさいな、嫌だな、きょうは気分が乗らないなど思つてパンをつくると、いまひとつな味に仕上がらない。

一方、パンづくりが楽しくて仕方ない、お客様に喜んでいただきたいという気持ちでつくると、やっぱりおいしいパンになるんですよ。私はうちの店に修行に来ているスタッフたちに、もちろん技術を学んでもらいたいと思つていますが、それ以上に人として育つてほしい、人間性を磨いてもらいたいと思つています。スタッフにはいつも「行列を見ていい気分になるな」と。お客様は本当においしいと思つて並んでくれているか、自分たちのパンづくりは進歩しているか、うめぼれることなく自らに問い掛け続けることが大事だと思つています。

「自反尽己」の言葉は知らなかったんですけど、同じ意味のことは常日頃スタッフたちに伝えていきますね。「店の中で起きたことは、すべてにおいて当事者でいなさいいけない」と。何か問題が起きた時に「俺は知らないよ」とか「あいつ

が悪い」って言うのではありません、全員が最後の最後まで当事者として解決の道を追求していくことが大事だと思つんです。また、長く仕事を続けていくと、惰性に流されてしまいがちですが、日々小さな差を追求し、自分の欠点を素直に認めて改善する視点、自己批判の目を持たない人は成長しません。

永久に未完、でも常に100%を目指して最大の努力を続けていく人が一流のプロと呼べるのであり、いつか100%満足できる理想のパンがつくれると信じて、きょうもまた厨房に立つのみですね。(終)

せられたんです。【桜井】 考え過ぎると、怪我が多くなるんです。心の怪我、考え方の怪我が。考えるのにも怪我があると僕は思つんです。羽生さんはそういう怪我をほとんどしない人だけど、僕が見ててこいつ考え過ぎて怪我してやがるなっていう人がいっぱいいる。

《対談》  
 『負けない生き方』  
 20年間無敗「雀鬼」の異名  
 桜井 章一(雀鬼会会長) VS  
 羽生 善治(将棋三冠)

【桜井】 そうそう。考えが瞬間瞬間に打つ練習をなさっていますけど、あれは考えないための練習という面もあるんじゃないでしょうか。

【桜井】 僕はね、いいことがあつたら他人がしてくれただと、悪いことがあつたら全部自分がやったことだと思つようになっているんです。これまでたくさんの人を指導してきて、そう実感するようになりました。だからこれは上から学んだことじゃない、下の人から学んだことですよ。そういう原点を忘れないためにも、僕は駐車場に入ったらず落つこちてるタバコの吸い殻を拾つんです。それはよいことをしようっていう良心で拾うんじゃない。ホームレスさんの気持ちになつて自分を律するため。浮かれてしまう自分も叱つて、自分に反るためともいえるでしょうね。

【羽生】 そういふ実践はとても大切なことだと思つます。まさに自反ですね。【桜井】 そういふのを習慣つけていると、どこかで助かるんですよ。いいことばかりやってやろうとするとか病気になる。でもそういう普通だったらやらないバカなこと、面倒なことをやってあえて自分を落としてみると、あとは上がるだけ。だから、僕はあまりスランプとかないんですよ。

【羽生】 以前桜井さんは、負ける時の九十九%の理由は自滅だとおっしゃっていました。言われてみれば確かにそうだなと納得しました。例えば、こう指してこれなら困るなとか、こうやったら負けるなとか思うのは、実は相手の思考ではなくて自分の思考なんです。自分で考えて、自分で負けているんですよ(笑)。だから負ける理由が自滅だというのは、すごく納得させられたんです。

【桜井】 僕が「間に合う」っていうことも大切にしている、目の前の一つひとつのことにちゃんと間に合わせることで物事がスムーズに進んでいくんですが、考えないというところは、間に合わせるためにも大切なんです。

【羽生】 「自反尽己」というテーマですが、つまるところは、自分にできることを常に精一杯やっていくしかないと思います。結果はどうなるか分からないですけど、その時、その時に自分なりのベストを尽くすこと。それでどうにもならないこともありますが、その時はまた、その起こった出来事に対応していく。

【羽生】 先人の方々の同様な教えがたくさんあります。「いいことはおかげさまでわるいことは身から出たさび」(相田みつを) 物事がうまくいったときは「これは運がよかったのだ」と考え、失敗したときは「その原因は自分にある」と考える (松下幸之助) 『自反尽己』。常に心に刻んでおきたい金言です。

# 天皇さまが

## 泣いてござった

以前ご紹介しました、仲間の主催する「池川明・寺岡賢 講演会」に参加してきました。公益財団法人修養団講師・寺岡先生の講演は3度目でしたが、感動溢れるお話今回も会場は涙に包まれていました。終盤、「天皇が泣いてござった」という書籍にもなっている昭和天皇の悲話を心からの気持ちを入れて伝えてくださいました。以下にご紹介します。

終戦時、戦争責任を感じられた天皇陛下は、責任を取って退こうと思われましたが、今自分が退くよりも戦いに傷ついた国民を慰め、励まし、勇気づけることの方がずっと大事だと思われる、国民を励ますために昭和21年から8年半かけて、全国を御巡幸に廻られました。

昭和24年5月、佐賀県にある因通寺というところにかかれた時のことです。そこにある洗心寮では戦争で親を亡くした子どもたち40人余りが引き取られて育てられていました。

緊張して挨拶がきちんとできない子どもたちもいるなかで、天皇陛下は自分から近づいて一人一人にお声をかけられました。

「おいくつ?」「七つです」「五つです」「どこから?」

「満州から帰りました」

「朝鮮から帰りました」

「立派だね。元気にね」。

そして「さよなら」「さよなら」と声をかけて次の部屋に進みました。

すると最後の部屋でそれまで穏やかだったお顔がにわかにかげり表情になりました。

陛下は、その時突然、ある一点を見つめて足を留められました。そこに

は二つのお位牌をじつと胸に抱いた10歳の女の子がいたのです。

陛下はその女の子へお顔を近づけられ、

「お父さん? お母さん?」とお尋ねになりました。

女の子が「はい。これは父と母の位牌です」と、返事をしました。

「どちらで?」

「はい。父は満州とソ連の国境で名誉の戦死をしました。母は引き揚げの途中で病気で亡くなりました」と答えました。

陛下が「お淋しくない?」と聞くと、

「いいえ。淋しいことはありません。私は仏の子どもです。仏の子どもは亡くなつたお父さんとも、お母さんとも、お浄土にまいつたら、きつともう一度会うことが出来るのです。お父さんに会いたいと思うとき、

お母さんに会いたいと思うとき、私は御仏さまの前に座ります。そして、そっとお父さんの名前を呼びます。そつとお母さんの名前を呼びます。するとお父さんも、お母さんも、私のそばにやって来て、私をそつと抱いてくれるのです。私は淋しいことはありません。私は仏の子どもです」と答えました。

陛下と女の子はじつと見つめ合いました。さらに陛下は部屋の中に入られ、右の手に持っていた帽子を左に持ち替えられ、右手を女の子の頭において、撫でられたのです。

陛下は「御仏の子どもはお幸せね。これから立派に育つておくれよ」と申され、畳の上にハラハラと大粒の涙を流されました。

すると、女の子は思わず「お父さん」と呼びました。周りのお付きの方や新聞記者たちも静まりかえり、皆涙を流していました。

陛下が寮から出られるとき、子どもたちが皆ついてきて陛下の袖を持ち、「また来てね、お父さん」とすがりつきました。陛下は、流れる涙を隠そうともせず、「うん」「うん」とうなずかれ、お別れになられました。

後に陛下より一首の和歌がお寺に届けられました。

「おいくつ?」

「七つです」「五つです」

「どこから?」

「満州から帰りました」

「朝鮮から帰りました」

お母さんに会いたいと思うとき、私は御仏さまの前に座ります。そして、そっとお父さんの名前を呼びます。そつとお母さんの名前を呼びます。するとお父さんも、お母さんも、私のそばにやって来て、私をそつと抱いてくれるのです。私は淋しいことはありません。私は仏の子どもです」と答えました。

陛下と女の子はじつと見つめ合いました。さらに陛下は部屋の中に入られ、右の手に持っていた帽子を左に持ち替えられ、右手を女の子の頭において、撫でられたのです。

陛下は「御仏の子どもはお幸せね。これから立派に育つておくれよ」と申され、畳の上にハラハラと大粒の涙を流されました。

すると、女の子は思わず「お父さん」と呼びました。周りのお付きの方や新聞記者たちも静まりかえり、皆涙を流していました。

陛下が寮から出られるとき、子どもたちが皆ついてきて陛下の袖を持ち、「また来てね、お父さん」とすがりつきました。陛下は、流れる涙を隠そうともせず、「うん」「うん」とうなずかれ、お別れになられました。

後に陛下より一首の和歌がお寺に届けられました。

「おいくつ?」

「七つです」「五つです」

「どこから?」

「満州から帰りました」

「朝鮮から帰りました」

「立派だね。元気にね」。

そして「さよなら」「さよなら」と声をかけて次の部屋に進みました。

すると最後の部屋でそれまで穏やかだったお顔がにわかにかげり表情になりました。

陛下は、その時突然、ある一点を見つめて足を留められました。そこに

は二つのお位牌をじつと胸に抱いた10歳の女の子がいたのです。

陛下はその女の子へお顔を近づけられ、

「お父さん? お母さん?」とお尋ねになりました。

女の子が「はい。これは父と母の位牌です」と、返事をしました。

「どちらで?」

「はい。父は満州とソ連の国境で名誉の戦死をしました。母は引き揚げの途中で病気で亡くなりました」と答えました。

陛下が「お淋しくない?」と聞くと、

「いいえ。淋しいことはありません。私は仏の子どもです。仏の子どもは亡くなつたお父さんとも、お母さんとも、お浄土にまいつたら、きつともう一度会うことが出来るのです。お父さんに会いたいと思うとき、

お母さんに会いたいと思うとき、私は御仏さまの前に座ります。そして、そっとお父さんの名前を呼びます。そつとお母さんの名前を呼びます。するとお父さんも、お母さんも、私のそばにやって来て、私をそつと抱いてくれるのです。私は淋しいことはありません。私は仏の子どもです」と答えました。

# みほとけの

## 教へまもりて

### すくすくと

### 生い育つべき

### 子らに幸あれ

因通寺の住職は、この和歌に込められた陛下の思いを皆に聞かせようと、和歌を寺の梵鐘(鐘)に刻ませました。今でも因通寺に行くとき、この梵鐘の響きが故郷の響き渡っているといわれています。(終)

天皇陛下は、毎朝国のために祈りをさされていきます。皇室は愛する国民のことをいまでも『大御宝』(一番の宝物)といつて何よりも大切に思われています。まさに実感させていた

だく感動悲話でした。

終戦以来、大切な日本人の心を置き去りにしてきた教育……。子どもたちの未来のためにいざ私たちは?

誰かを思いやるためにはまず自分のことを大事にする

こと、そのために何より生まれたこの国に誇りを持つこと。日本人として生まれたことを大切に、改めて過去に学ぶ。今回も寺岡先生は心からの熱い思いを伝えてくれました。

今回の講演テーマは『今日一日をよるこんで生きていく』でした。

生きていくといろんなことが起きてくる。それでもなお、今日という日を生きてもいかなければならない。足りないものに目を向けるよりも、すでに与えられているものに目を向けていくことが大事。

幸せを感じる、神様に愛される生き方、それは「苦しいとき、辛いときを大事にしていく」「苦」をも、よろこびとしていただいていくという覚悟を決めるといふこと。

今回も沢山の金言を、復唱しながらお教えいただきました。二つご紹介しました。

自分さておき

人様に

己忘れて

精魂尽くす

よろこびば

よろこびごとが

よろこんで

よろこび集めて

よろこびに来る

以前拝聴した際の内容

「美しいころ 日本のごころ」を特集した当紙2012年11月号をご希望の方にお届けいたします。遠慮なくお申し込み下さい。

# お母さんを

## 笑顔にするために

### 生まれてきた

### 胎内記憶の権威、

### 池川明先生の講演より。

子どもたちはみな「お母さんを笑顔にする、幸せにする」というミッションを持って生まれてくる。そのための愛をお腹の中にいるときから感じ取ろうとしているのに、愛が伝わらずこの最初のミッションに失敗すると、育っていくうえでその先の本来の大事な目的に向かえない。

子どもたちに愛を伝えるために3つの大切なこと、

①存在の受容 ②信じる ③応援する をぜひ妊娠中から意識してやってほしい。

これまでの高度成長期の決まっている答えを早く出すという時代に育ってきた私たちは、あまりそのようにされてこなかったが、これからの時代に「答えがないものに挑戦して創造的な答えを見つめる能力」を身につけさせるためには「生まれてきてよかったと感じられる愛」を与え続けることがとても大切。

「人生は思い込み」。愛に基づき行動で、宇宙からお母さんを助けに来た宝物を大切に、いつも笑顔で愛ある声がけをして魂を感じる育児に励んでほしい。(終)

池川先生の講演参加にあたり思い立って(以前ご紹介した)絵本作家のぶみさんの胎内記憶を書いた話題作『このママにきーめた!』を駅ビルで購入。再会のご挨拶をさせていただくと、

「この書籍の製作段階で、のぶみさんが相談に来られたよ」と。絵本を持ったツィショットのPR写真を快く撮っていただきました。

そしてその3日後、たまに当社に新聞以外のご用で若い妊婦さんが来店。自分が対応して、おせっかいで胎内記憶のお話をして盛り上がり、絵本をお貸ししました。その時の笑顔に、有難くお腹の中の赤ちゃんの笑顔が浮かびました。

おせっかいといえば、先月号で書籍紹介しました、おせっかい協会の高橋恵さん主催のホームパーティーに参加してきました。

参加の20数名のなかで知人は一人だけでしたが、同じ思いを持つ人の繋がりの空間は最幸のエネルギーがあふれ、笑顔満開のとても素晴らしい場を共有させていただきました。

一歩踏み出して繋がった有難いご縁を大切に、これからも、できる限り「見返りを求めない、愛に基づきおせっかい」に励んでまいります。感謝合掌。

編集後記

池川先生の講演参加にあたり思い立って(以前ご紹介した)絵本作家のぶみさんの胎内記憶を書いた話題作『このママにきーめた!』を駅ビルで購入。再会のご挨拶をさせていただくと、

「この書籍の製作段階で、のぶみさんが相談に来られたよ」と。絵本を持ったツィショットのPR写真を快く撮っていただきました。

そしてその3日後、たまに当社に新聞以外のご用で若い妊婦さんが来店。自分が対応して、おせっかいで胎内記憶のお話をして盛り上がり、絵本をお貸ししました。その時の笑顔に、有難くお腹の中の赤ちゃんの笑顔が浮かびました。

おせっかいといえば、先月号で書籍紹介しました、おせっかい協会の高橋恵さん主催のホームパーティーに参加してきました。

参加の20数名のなかで知人は一人だけでしたが、同じ思いを持つ人の繋がりの空間は最幸のエネルギーがあふれ、笑顔満開のとても素晴らしい場を共有させていただきました。

一歩踏み出して繋がった有難いご縁を大切に、これからも、できる限り「見返りを求めない、愛に基づきおせっかい」に励んでまいります。感謝合掌。